



Title	河井寛次郎における戦時下の「思想上の転機」：その背景と展開
Author(s)	宮川, 智美
Citation	デザイン理論. 2015, 66, p. 59-73
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56294">https://doi.org/10.18910/56294</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 河井寛次郎における戦時下の「思想上の転機」 — その背景と展開 —

宮川 智美

キーワード

河井寛次郎, 近代工芸, 自然観, 戦争

Kanjiro Kawai, modern crafts, view of nature, war

はじめに

1. 背景

2. 思索の過程

3. 造形物への投影

おわりに

## はじめに

河井寛次郎（1890-1966年）の太平洋戦争中の動向は、近年、河井寛次郎記念館編集の詳細な年譜において、私的な資料である彼の日誌が引用されることで、次第に窺えるようになった<sup>1</sup>。本稿では、近代の陶芸家として知られる河井について、戦争中の彼の思索を跡付け、戦後の創作活動との関連を明らかにする。

先行研究におけるこの時期の扱いは、焼成が出来ずに思索に耽ったとされ、戦後の作風への節目と位置づけられるのが定型的である<sup>2</sup>。ここで「思索」やその「成果」とされる内容は具体的ではなく、昭和19年から昭和23年までは、ほとんど空白期間のように扱われている。言い換えれば、戦争中は造形作品が残されておらず、節目とは位置づけられるものの、それ以上には触れられてこなかった。

こうした現状を踏まえて改めて本稿で戦時下の河井の思索を辿ることは、三つの意図に依る。一つ目は、河井自身がこの時期を「思想上の一転機」だと考えて重視している点である<sup>3</sup>。詳細は後述するが、彼はこの時期に「機械と手とが一つだ」という認識の変化と、虫と葉っぱの関係から「自然ノ大調和」を理解したという、二つの「転機」があったと後に言及している。この「転機」という言葉は、あくまでも彼の自覚を表明するものであり、必ずしも客観的に前後の変化を指摘できるものではない<sup>4</sup>。しかし、河井本人が重視しているにも関わらず、現状ではそれに見合った研究がなされているとは言えない。

二つ目は、彼の戦後の創作活動の基盤となるからである。これまで戦後の創作については、

本稿は第56回大会（2014年7月27日、於：お茶の水女子大学）での発表に基づく。

前述の通り戦争による中断を節目とする見方が強く、それ以前からの連続性を理解する姿勢が不十分であった。そのため、彼の意図が十分に検証されないまま、個性や感性に従った「自由な造形の世界」としてのみ捉えられてきたのではないか<sup>5</sup>。

三つ目は、この時期の思索の過程には彼の特徴がよく表れている点である。彼は、教育によって体系的に身につけた窯業技術と、宗教的な生命観により<sup>6</sup>、彼独自の「科学的知識に基づく世界観」を形成したと考えられる。

以上を念頭に置きながら、本論では、まず戦時下の河井の具体的な行動を明らかにし、思索の過程とその内容を、三つの観点——機械に対する認識の変化・生物学的関心・食と故郷——から辿ってゆく。そして、これがいかに造形物に投影され、戦後の創作活動へと繋がるかを明らかにする。

## 1. 背景

### 1-1. 背景

河井寛次郎が作陶の技術を身につけたのは、東京高等工業学校窯業科及び京都市陶磁器試験場においてである。その後、京都五条坂を制作地とし、高島屋を中心に個展を行って作品を発表してきた。まずは議論の前提として、彼が戦時中におかれていた状況を確認しておきたい。

制作環境に影響を及ぼしたのは、1940年の奢侈品等製造販売制限規則をはじめとした資材及び物価の統制である。河井が居た京都は、特に「工芸的高級陶磁器」の生産を主体とするため、これらの統制に大きな打撃を受けた<sup>7</sup>。但し、1941年8月12日に「芸術保存ニ関スル件」という商工次官通牒が各府県知事宛に発せられ、例外を許可する具体的措置が講じられている<sup>8</sup>。河井もこの例外に該当し、燃料等の配給を受けて制作を続けたと考えられる<sup>9</sup>。しかし実際は、材料の運搬を含めた燃料資源の不足や、空襲警報に伴う灯火管制、応召による人材の不足などから影響を受けないはずはなく、彼も1943年から個展の開催が中断され、1944年11月から終戦後の1945年12月までの約一年間にわたり焼成が出来なかった<sup>10</sup>。自らの意思に反して制作が出来ないのは、河井にとって作陶開始以来初めて置かれた状況である。彼は1945年に55歳であり、成熟した芸術家として仕事に打ち込みたい時期に、思うように陶芸に取り組みなかったことになる。

一方で、京都五条坂の藤平陶芸が海軍からの依頼で進めていた、ロケット戦闘機「秋水」に関わる「○呂〔マルロ、○の中に呂の文字を入れる〕」計画に強い関心を示し、工場に出入りして技術上の意見を述べるなど<sup>11</sup>、戦争の時代を生きた技術者としての一面も窺える。また、町内会長として物資の配給や防空訓練を行い<sup>12</sup>、戦争に特に積極的に関わらざるを得ない立場にあったことが分かる。

## 1-2. 文筆活動

このような状況下で焼成が出来ないことの影響を考える時、最も重要なのは、故郷である島根を題材とした文章を書き始めたことである。当時河井は、毎日の詳細な日誌と、「思い出すこと」と題した原稿との、二つを並行して執筆していた。以下、それぞれに概要を説明する。

まず日誌は、これまでに『毛筆日誌』（河井寛次郎記念館所蔵）として公開されてきた、1944年から1947年までに書かれた河井の日誌である。半紙の半分を概ね一日分とし、毛筆で一日の行動や思索の跡を詳細に記録している<sup>13</sup>。これは同時代の記録として大変重要なものであり、本稿では1945年までの「転機」と関わる箇所を中心に参照する。

一方、「思い出すこと」という原稿は、発表を前提とせず1943年末から書き始めたものである。執筆の趣旨は「子供ノ時ノ食味、トリワケ中海産ノ雑魚ヤ調理ヲ思ヒ出シツ、」書いたとされるように<sup>14</sup>、故郷の食材や調理法を記すことにある。原稿の執筆は、毎日の仕事として位置づけられ、推敲を重ね、清書している。残念ながら、原稿の実物は現時点では確認されていない。ただ、当時の日誌には原稿執筆の進捗状況が細かく記され、その題名と内容から、これが戦後発表された随筆とほぼ同一のものだと考えることが出来る<sup>15</sup>。

この「思い出すこと」を元にしたと考えられる故郷を題材とした文章は、1946年から死去する1966年11月まで断続的に発表が続けられた（表1）。例えば代表的なものとして、雑誌『工芸』に掲載された「町の神々」、  
「安来の窯場」ほか、『民芸』に連載し中断した「五十年前の今」や、「六十年前の今」などが挙げられる。実に20年余りにわたり、戦争中と同じ題材で文筆活動を行っていたことが分かる。河井の晩年の思想の根本は、戦時下の焼成が出来ない時期にその基盤が形成されたと言える。

表1 故郷を題材とした河井の著作

出版年月	著作タイトル及び掲載紙
1946年10月	「野菜の信号」『サンデー毎日』1403号
1947年	『火の願ひ』
1947年3月	「町の神々」『工芸』116号
1947年9月	「安来の窯場」『工芸』118号
1947年11月	『町の景物』
1948年7月	「模様之国、紺屋の仕事」「洋燈と幻燈」『工芸』119号
1948年10月	「愛さるるものは美し」『日本民芸』1号
1949年2月	「ぼてぼて茶」『北方民芸』17号
1949年4月	「野菜の信号」『日本民芸』2号
1950年2月	「味ではない味」『くろゆり』2巻
1950年11月	「土語駄草」『文芸春秋』28巻15号
1950年12月	「眠れる者達」『日本民芸』3号
1955年	「五十年前の今」 (1年間『民芸』に連載し中断)
1958年3月	「松江とその周辺」『天魚』1巻1号
1963年4月	「過ぎ去った今」『規範国語読本』
1962-1966年11月	「六十年前の今」(『民芸』に連載)

## 2. 思索の過程

### 2-1. 機械に対する認識の変化：「機械と手とが一つ」

それではここから、河井の思想形成の過程とその内容について、機械に対する認識の変化・

生物学的関心・食と故郷という三点から検討してゆきたい。

まずは、河井自身も一つ目の「転機」と考えた、機械に対する認識の変化についてとり上げる。彼は「機械と手とが一つだ」<sup>16</sup>という「機械ニ対スル見方ノカクメイ」<sup>17</sup>を、「思想上の一転機」として記している。この記述が初めて見出されるのは、1944年7月の日誌で、「コウモリ」という原稿の執筆時である。これは、1964年に発表された文章と対応する<sup>18</sup>。

ここでは、人間が飛行機を作り出す過程を、蝙蝠が翼を獲得する「進化」の過程に重ね合わせている。飛行機というと、現代では旅客機が身近だが、この原稿の構想段階では「コウモリ進化ノ過程ヨリ飛行機ヤ潜水艦ハ人間ノカラダノ延長カラダノ拡大デキカイデナイ事ガワカツテ来テ」<sup>19</sup>と記されるように、潜水艦と併記される戦時下の軍用機を具体的に想定していたことが分かる。当時これらは、ラジオなどを通じ耳目に触れる対象であり、最新技術の粋であると同時に、言うまでもなく戦地においては残虐な目的を持つ道具である<sup>20</sup>。

以後、兵器以外にも、情勢を知るために不可欠であったラジオについて、それが故障した際には「盲目ニナリシト等シ」<sup>21</sup>と記して「目」に見立てている。随筆では、より広範に「電燈の目」、起重機や圧搾機（手）、汽車や自動車（足）などを挙げて、機械を人間の身体の機能を強化したものとして捉えている<sup>22</sup>。

河井のこの認識で特徴的なのは、機械が人間を疎外するのではなく、人間の意思に基づき働く不可分な存在だと考える点である。それは彼の「機械をどうかする前に、人をどうかするのが先決である事は言ふ迄もない」という言葉に表れている<sup>23</sup>。

## 2-2. 生物学的関心

河井が、機械と人間との関係を「進化」に例えて理解したことにも表れているように、動物の体の発達と人間の道具との対比には、生物学の文献からの影響を指摘できる。

日誌には、「此間御貸シセン『ワトソンノ生物誌』ヲ一気ニ読ンダトテ中々話サル今日ハシイトンノ動物小説四冊御貸シス」<sup>24</sup>と記され、河井が、ワトソン（Elliot L. Grant Watson, 1885-1970）の『生物誌』などを知人に貸して、議論していたことが分かる。この本には、他の動物に比べて人間の手の発達が不完全なために、動物ならば備えている器官に代わって、人間が様々な道具を作ってきたことが記されている。例えば、「カウモリの翼は飛翔に、またアザラシの鱗は泳ぐために、人類の手よりずつとよく適してゐる」という一節を見出すことができる<sup>25</sup>。また、「動物の身に具へた武器を調べてみると」、「使用目的が限定され」るのに対し、「人間の手のみが、多くの使用に応じ得る性能を留保してゐる」ため、「鱗を模倣出来るやうに人間はその手を橈やオールに延長した」とされ、河井の文章との類似が認められる。

陶芸家として知られる河井を論じる際に、生物学的文献<sup>26</sup>を参照することは、意外にも思わ

れるが、彼の愛読書にこうした分野が多く含まれていたことは、周囲の人物により記録されている。弟子の高橋一智は、河井の蔵書の分類を試みようとするに「ダーウィンのビーグル号航海記、種の起源、クロボトキンの相互扶助論、ファーブルの昆虫記、シートンの動物記等、その他多くの生物に関する書物の層状に出遭う」ことを指摘している<sup>27</sup>。特にファーブル (Jean-Henri Fabre, 1823-1915年) の『昆虫記』については、「終わることを忘れたような師の手振り入りの熱意のこもった昆虫記物語」をよく聞かされ、「昆虫記の各篇を詳細に体得していた」<sup>28</sup> という。甥で河井のもとで作陶をした河井武一も、棟方志功が「話好きな叔父にシートンの『動物記』やファーブルの『昆虫記』などを読んでもらってよるこんでいた」ことを回想している<sup>29</sup>。こうした回想を裏付けるように、河井寛次郎記念館の旧蔵書目録でもこれらの所蔵が確認できる<sup>30</sup>。

河井が生きた時代にこうした生物界を語ることは、「ダーウィニズム」に代表される自然科学に影響をうけた世界観を伴うものであったと考えられる。つまり生物界の法則を、人間の社会秩序や倫理観に対応させて論じる側面がある。例えば、ファーブルが進化論に否定的な立場を取ったことはよく知られ、当時は政治的関心を持って受け止められた<sup>31</sup>。日本で『昆虫記』は、無政府主義者の大杉栄によって初めて全訳が試みられている。河井と深い交流を持った柳宗悦も、思想形成の初期に、動物観察に基づいて相互扶助思想を記した、ピョートル・A・クロボトキンに強く惹かれていたことが指摘されている<sup>32</sup>。

河井の作品には、昆虫をモチーフとしたものもある。例えば、毎日新聞の挿絵に使用された小間絵 (図1) には、社会性の強い昆虫とされる蜂が描かれ、こうした文脈で言及されることの多いモーリス・メーテルリンクの『蜜蜂の生活』が連想される。

とはいえ、河井の生物学的な関心は、直接的に昆虫を造形作品のモチーフとするよりも、むしろ自然科学の世界観を内面化することで彼の創作と深く関わっていく。



図1 小間絵集, 1929年, 河井寛次郎記念館蔵

### 2-3. 食と故郷：「自然ノ大調和」

これらを踏まえて、さらに食と故郷への関心を検討したい。これは、1949年に「これ迄嘗つて思つた事もない思ひ」<sup>33</sup>として発表された、河井自身の言うもう一つの「転機」と重なるだろう。彼は、散歩中に見た虫と葉っぱの光景を次のように記している。

木ノ葉ハ虫ニ喰ハレテ居ル、虫ハ木ノ葉ヲ喰ツテ居ル、ノガ木ノ葉ハ虫ヲ育テ、居ル 虫ハ木ノ葉ヲ育テラレテ居ル、ノ喰フ者喰ワレル者——争鬪ノ修羅場モ喰ベサス者喰ベサ



セラレル者デアツタラドウカ／争闘ト観ルノハ迷ダ，コレコソ自然ノ大調和デナクテ何  
ダ<sup>34</sup>，

食物連鎖や弱肉強食を連想させるこの記述からは、彼の社会情勢についての認識を窺うことが出来る。娘による回想では、河井は「虫がアメリカやイギリスで、葉っぱが日本の姿だと思っていた」と語ったとされ、自然界の法則に、戦時下の国際情勢を例えたものであったことが分かる<sup>35</sup>。これを「自然ノ大調和」として受け入れることは、戦闘による「殺し-殺される」関係を肯定したことになるが、これには食べるものに切迫する日常が前提にあると思われる。都市では食料事情が悪化し、「誰モ彼モ食フ事ニ懸命也」<sup>36</sup>という日記の記述が当時の様子を表している。河井は町内会での配給も行っており<sup>37</sup>、彼の置かれた状況を踏まえれば、食べることを否定的に捉えることは難しかったのではないか。

むしろ食べ物やその行為に関心を高め、神聖視する彼の態度を指摘できる。河井が初めて魚を料理した際、「陶器ヲ作ルト別ニ変ツタモノニ非ズ」<sup>38</sup>と記したのは象徴的であろう。また、前述の通り「思い出すこと」を執筆する当初の趣旨は、故郷の食文化を記すことにあった。鯛も、吉祥文様となれば「たんなる食欲の対象ではない」<sup>39</sup>。この他、子どもの頃食べた味噌には「味ではない味がつけられていた」と言うが、それは「薄墨色の空に舞ふだんびら雪、雪を冠つた南天の赤い実、雪に暮れた町家の障子の明り、洋燈の下の炬燵、ぼてぼて茶の集り」として挙げられる、食品ではなく、それを取り巻く土地の自然や風習のことを指している<sup>40</sup>。このように彼は、随筆の中で故郷の食生活の文化的側面を強調している。

生物学の文献は、ここでも参照されたと考えられる。ファーブルの『昆虫記』では、「自然の群はそれぐの餌食に依つて特徴づけられ、判然と現はれてゐる」<sup>41</sup>と記され、「人間の食はないものは只一つだつてあるだらうか」とも指摘される。河井の随筆にはこれと類似した次のような文章があり、彼が生物学的関心を理論とすることで食への関心をいかに発展させたのかが窺える。

それにしても食べられたものは、食べたものに生きる——死ぬ事なく生き通してゐるいのち。／多種多様なものを食べる事では、人に及ぶ生きものはなさそうであるが、そんな多くの生きものが、人のからだの中にうぢやうぢや生きてゐるとしたならば、どうであらう。たとへそれが、人といふ命にすべくられてゐるといふものの、だからこそ今のやうな世の中が作られたのかも解らない。単一なものしか食べてゐなかつた時には、それだけの世の中しかつくれなかつた事を思ふと、人は物だけではなく、そのいのちも食べてそれを自分の働きに置き換へてゐると思つては、間違ひであらうか、牛よ、葱よ、豚よ、鶏よ、

大根よ，燕よ，鯨よ，鮪よ<sup>42</sup>

ここには、食べ物として取り込んだものを創作の源とする河井の考え方が表れている。彼にとってその創作の源は、随筆にみられる理想化された故郷であり、また複雑化する社会を成り立たせる多種多様な摂取物だということになる。

ここで、河井の「故郷」の記述について検討を進めたい。一見すると随筆は、穏やかな日常の思い出話である。登場するのは無邪気な「子供達」であり、「春」になって彼等が「大人」に近づく兆しが描かれている。

例えば、暖かくなって燕と共に現れるのは「新しい電線をかけに来た」「電信工夫の人」であり、「燕が南方から持つて来たなぞの生態の様に、此の増設されやうとする電線は、子供達には遠い都会の鼓動が、此の町にちかにつながる様な気がして嬉しかった」という<sup>43</sup>。この電信工夫は「徳川時代からの日本の職人の胴体が、外国風の頭と足ではさまれ」たような服装をしているが、「新しい時代を現はしてゐる様」で「技術家を権威付け」てもいた。河井はこれを「維新前後から日本人がどう外物を受取ったかといふ具体的な標本」だと見なしており、「滑稽」であると同時に新しい技術を獲得する高揚感をも伝えている。また、社日桜として知られる郷里の名木に代わり、「一番派手で一番成長の早い」ソメイヨシノのような桜が群で植えられるようになったのは「各地共一緒で、花は個から群へ、群から団へと、結束させられて、ワツシヨワツシヨと春に向つて、行進させられる事」になったという<sup>44</sup>。こうして「彼等が大人になつてからの今は」「笑ひを忘れた世紀……走る事だけで、歩く事を忘れてゐる世紀……時間をちぢめる事だけで、のぼす事を忘れてゐる世紀……あはてる事に忙しく、ゆとりを忘れた世紀」だと描写される<sup>45</sup>。

ここで「子供達」の成長を、日本各地が経験した近代化ないし西欧化の進展と重ねていることは明らかである。河井の近代史観を詳細に論じるのは今後の課題だが、ここでは戦時中の彼の思索において、近代以降の日本をいかに捉えるかという問題意識が色濃く存在することを確認しておきたい。

### 3. 造形物への投影

#### 3-1. 機械への関心の高まり

それでは、こうした思索の深まりが実際の造形物にどのように投影されたのかを考えたい。

戦後彼が創作にあたり参照した対象は、陶器という領域を超えて拡大した。彼のスクラップ・ブックには、電車の連結部やオート三輪などの切り抜きが残り、彼がこうした先端技術による機械製品に関心を寄せていたことが窺える（図2）<sup>46</sup>。これまでこの関心は、高度経済



成長の時期に急速に身近になった新しい機械製品に対する興味として捉えられ、また木彫などを中心に作品の「かたち」に影響を与えたとされてきた<sup>47</sup>。ここでは、こうした関心が、戦時中の思索と一続きのものだということを指摘したい。

河井は、1950年から1962年頃にかけて、多数の木彫作品を制作した。木彫の一部には、型を取り、素材を変えて陶彫として制作されたものもある。こうした木彫作品において、手のモチーフや人物像とともに多数制作されたのが面である（図3）。彼はこれらの面を指して「トラックから貰ったもの」、「スクーターから貰った顔」と説明し、「何も彼も顔に見えてくる」と発言している<sup>48</sup>。こうした捉え方の背景に、機械を人間の身体の延長とする見方があることは容易に想像できる。

この他、双眼鏡から着想を得たとされる双頭壺（図4）は、陶器としては確かに「非日常的器形」である<sup>49</sup>。しかし双眼鏡を「どんな物でも見える目」<sup>50</sup>と捉えた時、同一の関心事となる。

一方、「食」への関心を踏まえると、これらの道具は、人間が「多種多様なものを食べ」たことで可能となった表現として肯定的に捉えられる。つまり戦後河井が、創作にあたり陶器以外をも広く参照するようになるのは、それらを人間の表現として受け入れ、関心を高めたからだと考えられる。

### 3-2. 有機体としての集落

生物学的関心から、河井自身が解釈を行ったのは、美しい集落の成り立ちについてである。彼は、1944年頃から京都近郊の集落を頻繁に散策しており、植田という村（図5、現在の精華町植田地区）については、特にその美しさを評価している<sup>51</sup>。この村について書いた「部落の総体」は、座談会などを除き、陶芸作品の発表が出来ない時期に発表された唯一の河井の著作として注目に値する。

彼は住居について、「人工と云ふよりは自然物に近く百姓自身の肉体そのもの」だと言い、機械についての認識と同様に、家とそれを作った人間を同一視している<sup>52</sup>。さらに、かまどを



図2 連結器切り抜き写真，1953年，河井寛次郎記念館所蔵



図3 《木彫面》1960年，河井寛次郎記念館所蔵



図4 《呉州三色打楽双頭扁壺》1963年，個人蔵

持つ台所は「家の内臓からいへば胃袋に相当」し、それぞれの家は有機体として捉えられる。言及される内臓が胃袋であるのは、食への関心に由来すると思われる。家は、「御互の平和を楽しむ緩衝地帯」を持って、美しい比率で配置され一つの村を形成するとされ、河井はこれを「偉大な設計者」による仕事だと考える。



図5 土手から見た植田村（『月刊民芸』6巻7号，口絵より）

この「大設計者の性格」を、彼は前述の『生物誌』に登場する、ユッカという花とプロヌバという蛾の関係を通して考察している。同書においては、この花は種子形成において蛾の行動を必要とし、蛾はその幼虫が花の種子を食物とするという点で「二種類が互ひに他を助けあつてゐる」「生命現象の一様式」として紹介される<sup>53</sup>。河井はこれを、時間と空間を超えた「われわれが知らない脈絡がある同一組織体」だと考え、美しい村の「大設計者」に同様の法則を見出している<sup>54</sup>。つまり、集落を形成する建築などは、ある特定の集団が持つ生物学的な習性と同様に、無自覚のうちに、互いに自然と調和状態を保つように形成されてきたと考えている。

こうした観点から河井が否定的に捉えたのは、強制疎開<sup>55</sup>によって気付いたという「明治以降無軌道、乱雑に流れた」都会の「勝手気ままな建築様式」である<sup>56</sup>。ただし河井は、京都鞍馬寺の歓喜院のように、建築家である宮地米三の仕事に設計指導として関わった際には「RC造の建築物に張りぼての意匠を施」しており、これは「構造と意匠の乖離」だと指摘されている（図6）<sup>57</sup>。河井は歓喜院の屋根を、合掌造りになぞらえて、文字通り「祈り」の表現として評価しており<sup>58</sup>、彼が新たな技術を受け入れつつ、周囲との外観上の調和を重視していたことが窺える。

### 3-3. 故郷の造形との類似

河井が食への関心を通して自らの創作の源を「故郷」に求めたことは、晩年の造形に反映されたと思われる。例えば、河井が「激愛」したと伝えられる出雲大津の瓦器は<sup>59</sup>、河井の扁壺と造形上の類似が認められる。出雲民芸館所蔵の貝焼焜炉（図7）を挙げると、三つの脚やくびれ、貝の形に合わせた楕円の口、胴部がなだらかに広がる形は、《黒釉三色打薬扁壺》（図

8) などの河井の作品に、同様の特徴を見出すことが出来る。彼はこうした瓦器を「出雲の造形の皿」を結晶させた形として高く評価しており<sup>60</sup>、自らの創作においてもこの実現を試みたと考えることができよう。

ただ、河井が創作の源とする「故郷」という言葉の射程は、自身が幼少期を過ごした島根という特定の時間的・地理的空間にとどまらない。濱田庄司は、1950年に行われた大原美術館での座談会において、同館が所蔵する陶器に、河井の近作と「全く同じ」形があること指摘した。この時比較されたのは、「五・六千年前」のエジプト初期に作られた「タクシブルー」の「取手のある長い角皿」だとされる<sup>61</sup>。恐らく、同館所蔵の《青緑釉長方形の皿》(図9)を指すのだろう。確かに、1947年頃から河井が制作した《白磁長鉢》(京都国立近代美術館所蔵)や《陶板》(図10)とよく似た形である。彼は同様の陶板を、取手の形や、内側に描く文様を変えながら1966年まで断続的に制作している。濱田のこの指摘に対し、河井は「自分が思いついた形と一しょなので、何かこう自分の前世に会ったような気がする、やつぱり私は、前生に生きていたということになる」と応じている<sup>62</sup>。彼は制作中にも同様の発言をしており<sup>63</sup>、自分の出自と直接には関係しない文化に、自らの創作活動との親和性があることを強く意識していたことが窺える。

さらに河井は、こうした親和性を自然界にも見出していく。例えば、沖縄の紅型について、八重山に生息する「大きな蛾は既に幾万年も前から最上の紅型を着てみた」ことから、この蛾こそ紅型の作者であり起源だと考えている<sup>64</sup>。同様に、エジプト初期の代表的な技法として挙げる練上手は、河井も昭和初期から用いた技法だが(図11)、「ほら貝」から「自然発生」したと説明される。河井は、「吾々の持つてゐる技術——東方の練上手や西欧の化粧陶器を既に幾万年も前にこの陶工〔ほら貝〕は



図6 鞍馬寺歎喜院外観(『くらま』387号より)



図7 貝焼焔炉, 出雲民芸館所蔵



図8 《黒釉三色打楽扁壺》1962年, 河井寛次郎記念館所蔵

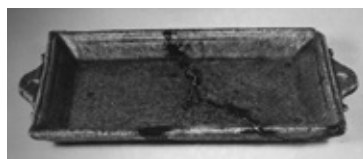


図9 《青緑釉長方形の皿》ローマ期, 大原美術館所蔵(『大原美術館Ⅳ』より)

焼きあげて」いたと言う。

これらは、ちょうど彼の生物学的関心に依るところの「知らない脈絡がある同一組織体」を体現するものであろう。つまり、直接の故郷である島根と、エジプトの皿に代表される時代や地理を超えた造形、さらには人間の手によらない自然界について、河井は創作行為を通じて相互に関連し合う物として捉え、かつ自らをその中に位置づけて考えていたと言えるだろう。

### おわりに

以上のように本稿では、河井が現実に置かれていた状況を踏まえて、戦争中の思索の過程を辿り、これが戦後の創作活動へといかに繋がるのかを彼自身の立場から見直した。

これまで指摘されることのなかった河井の生物学的関心は、「科学的」な思考法となって、彼が「転機」と考えた実生活上の困難、すなわち新しい技術に対する認識と、生命に関わる食と故郷についての思索を体系づけたと考えられる。

彼の戦後の創作活動については、陶芸や木彫などの造形作品は外観上の特異性が際立ち、かつ文筆活動を含むと学問領域を横断することから、これまで相互の関連性が見えにくかった。しかし、彼の思索の過程を跡付ける上でキーワードとした、機械に対する認識の変化・生物学的関心・食と故郷という補助線を引くことで、これらが一人の人物の中で重なりあって創作活動を成り立たせていたことが明らかとなる。

今回は、先行研究に特に不足していた、河井自身の言葉で彼の立場を理解することに重点を置いた。そのため、他の事象を踏まえた同時代における位置づけについての考察が不十分であり課題とされる。また、晩年の創作を、戦時中の思索から一続きのものとして捉えることには一定の成果を得たが、さらにそれ以前との連続性を踏まえ、生涯における思想形成を検証する必要があるだろう。

本研究は、JSPS 特別研究員奨励費14J11647の助成を受けたものです。



図10 《陶板》1950年、京都国立近代美術館所蔵



図11 《練上扁壺》1956年、河井寛次郎記念館所蔵

- 1 長谷川由美子編「河井寛次郎年譜」今井淳、宇野健一編『河井寛次郎の陶芸：科学者の眼と詩人の心』東大阪市民美術センターほか、2013年、118-149頁など。
- 2 内山武夫「発刊によせて」京都国立近代美術館編『河井寛次郎作品集』東方出版、2005年、11頁など。
- 3 河井寛次郎「機械は新しい肉体」思想の科学研究会編『私の哲学 続』中央公論社、1950年、154-155頁。
- 4 河井の文章には「転機」以前から晩年まで、継続して用いられる言葉が多く、「転機」を経た変化は、客観的には指摘しにくい観念的なものだとも考えられる。ただし「転機」として自覚する時期が、作風の変化と重なることは重要であろう。
- 5 松原龍一「河井寛次郎の陶芸作品」京都国立近代美術館編、前掲書、22頁。
- 6 拙稿「河井寛次郎の創作における『生命』の循環：技術観と『生命思想』の観点から」『文化資源学』12号、文化資源学会、2014年6月、47-60頁。
- 7 藤岡幸二編『京焼百年の歩み』京都陶磁器協会、1962年、123-128頁。『京都経済月報』京都商工会議所、19-20頁。なお引用は、原則として新字体を用いる。
- 8 西川友武『美術及工芸技術の保存』工芸学会、1966年、31-98頁。
- 9 藤岡、前掲書、152-155頁。また、森野泰明氏（2014年12月2日実施）及び河井透氏（2014年12月4日実施、透氏は1962年から河井武一のもと、寛次郎の窯での作陶を開始した）への聞き取りによる。柳宗悦宛河井寛次郎書簡、1941年2月17日、日本民芸館所蔵も参照。
- 10 『毛筆日誌』1945年12月27日。
- 11 藤平長一、北沢恒彦『五条坂陶工物語』晶文社、1982年、39-40頁。藤平陶芸の出勤簿（藤平陶芸有限会社所蔵）には立場は不詳だが河井の名前と出勤印が確認出来る。『毛筆日誌』1945年3月13日。
- 12 『毛筆日誌』1945年4月3日など。
- 13 河井の日誌は、他にこれに続く「和紙ノート」3冊、「ペン書きの手帳タイプのもの」7冊（1960-1966年）が残される（鷲珠江「河井寛次郎のこぼの世界」広瀬麻美ほか編『表現者河井寛次郎展』浅野研究所、2004年、130頁）。本稿では『毛筆日誌』と表記し、著者名は省略する。
- 14 『毛筆日誌』1944年1月22日。
- 15 河井久氏は、戦後、寛次郎が戦時中の原稿に加筆したものを、出版に際し清書したという（2014年10月25日実施の聞き取りによる、久氏は1961年から寛次郎に師事した）。
- 16 河井、前掲「機械は新しい肉体」154-155頁。
- 17 『毛筆日誌』1944年7月18日。
- 18 河井寛次郎「六十年前の今（32）：蝙蝠」『民芸』140号、1964年8月、38-40頁。蝙蝠についての同様の記述は『いのちの窓』（1948年）において「機械は存在しない／機械は新しい肉体」という言葉の自解にも見られる。
- 19 『毛筆日誌』1945年7月16日。
- 20 河井はこの両面性を「シヤクニサワルガ美しイヨ」と記している（『毛筆日誌』1945年4月2日）。
- 21 『毛筆日誌』1945年7月12日。



- 22 河井, 前掲「六十年前の今(32): 蝙蝠」。
- 23 河井, 同上書, 40頁。
- 24 『毛筆日誌』1944年4月2日。
- 25 ワトスン(朝山新一訳)『生物誌』創元社, 1940年, 296-300頁。
- 26 河井が好んだ著作は, 今日ではその文学的な表現から「動物文学作品」として扱われるのが一般的だという(小原秀雄「大杉栄と生物学」『大杉栄訳 フェアブル昆虫記』明石書店, 2005年, 15頁)。本稿では同時代の捉え方を尊重して「生物学的文献」と表す。
- 27 高橋一智『陶心隧道』緑の苗豆本の会, 1974年, 80-81頁。
- 28 同上書, 93頁。
- 29 河井つね, 河井武一ほか「河井寛次郎を語る座談会〈3〉」『島根新聞』1967年8月16日。
- 30 目録に確認できたのは, 以下の文献。アンリ・フェアブル(大杉栄, 椎名其二訳)『昆虫記』1-4巻, 叢文閣, 1927-1928年などフェアブルの翻訳書3件(29冊)。アーネスト・トムソン・シートン(内山賢次訳)『動物手帖』三笠書房, 1941年などシートンの翻訳書2冊。このほか, モーリス・メーテルリンク(園信一郎訳)『蟻の生活』改造社, 1932年やフェアブルの伝記も含まれる。なお, 蔵書は非公開とされる。
- 31 鈴木貞美『生命観の探求: 重層する危機の中で』作品社, 2007年, 133-142頁。
- 32 中見真理『柳宗悦: 「複合の美」の思想』岩波新書, 2013年, 41-69頁。
- 33 河井寛次郎「蝶が飛ぶ葉つばが飛ぶ」『PHP』28号, PHP 研究所, 1949年8月, 18-19頁。
- 34 『毛筆日誌』1945年8月4日。
- 35 河井須也子『不忘の記: 父, 河井寛次郎と縁の人々』青幻舎, 2009年, 21頁。教育学者の矢野智司が指摘する, 宮澤賢治が戦場での殺害を「食べる-食べられる」ことの問題として捉えていたのは同様の観点として興味深い(矢野智司『贈与と交換の教育学』東京大学出版会, 2008年, 176-177頁)。
- 36 『毛筆日誌』1945年4月30日。
- 37 河井須也子, 前掲書, 20頁。
- 38 『毛筆日誌』1945年3月2日。
- 39 河井寛次郎「模様之国, 紺屋の仕事」『工芸』119号, 1948年7月, 32頁。
- 40 河井寛次郎「五十年前の今(3): 味ではない味」『民芸』27号, 1955年3月, 10頁。
- 41 アンリ・フェアブル『昆虫記(3)』椎名其二訳, 叢文閣, 1928年, 391頁。
- 42 河井寛次郎「六十年前の今(17): にしとがんにやとなまこ」『民芸』125号, 1963年5月, 40-42頁。
- 43 河井寛次郎「六十年前の今(2): 春は近づく」『民芸』110号, 1962年2月, 36-38頁。
- 44 河井寛次郎「六十年前の今(4): 社日桜」『民芸』112号, 1962年4月, 40-41頁。
- 45 河井寛次郎「六十年前の今(38): 冷凍された子供達」『民芸』146号, 1965年2月, 38-39頁。
- 46 横堀聡「河井の真実」『河井の真実: 河井寛次郎生誕120年にむけて』2009年, 81頁。
- 47 杉浦美紀「河井寛次郎と木の造形」, 前掲『表現者河井寛次郎展』140頁。
- 48 河井寛次郎, 佐藤三千雄ほか「美のこころ」『美について』布教研究所, 1959年, 91頁。



- 49 内山, 前掲書, 11頁。
- 50 河井, 前掲「六十年前の今(32): 蝙蝠」, 39頁。
- 51 『毛筆日誌』1944年2月25日。
- 52 河井寛次郎「部落の総体」『月刊民芸』6巻7号, 1944年7月, 2-7頁。
- 53 ワトスン, 前掲書, 101-108頁。
- 54 徳川夢声, 河井寛次郎「問答有用」『週刊朝日』63巻30号, 朝日新聞社, 1958年7月20日, 26-31頁。
- 55 京都は三次にわたり強制疎開(建物疎開)が行われ, 1945年3月には五条通の南側が対象とされた(川口朋子「京都における広域建物疎開の実態」『人間・環境学』16号, 京都大学大学院人間・環境学研究科, 2007年12月, 123-135頁など)。河井は疎開の様子を, 度々『毛筆日誌』に記している。
- 56 河井寛次郎「ほん物の知恵、土台に築け日本的新文化」『大阪毎日新聞』1945年8月20日。
- 57 石川祐一「河井寛次郎の建築意匠: 民芸運動による建築的成果」『デザイン理論』46号, 意匠学会, 2005年, 5-19頁。
- 58 河井寛次郎「歓喜の出世」『くらま』387号, 鞍馬弘教総本山鞍馬寺出版部, 1964年3月, 2-3頁。
- 59 多々納弘光「河井師と出雲の工人たち: 出雲民芸館で河井寛次郎生誕百年記念展」『民芸』458号, 1991年2月, 26頁。瓦器については, 多々納弘光「出雲・大津の瓦器」『民芸』60号, 1957年12月, 36-38頁。また吉田璋也「現代日本民窯」『民芸』52号, 1957年4月, 2-9頁。
- 60 多々納弘光『出雲の民窯出西窯』ダイヤモンド・ビッグ社, 2013年, 34-37頁。
- 61 河井寛次郎, 佐藤三千雄ほか, 前掲書, 60-62頁。また, 河井寛次郎「民族造形の祈願②: 生産と美の救い」, 出典不詳, 1965年8月頃, 河井寛次郎記念館所蔵スクラップ・ブックより。
- 62 梅原龍三郎, 河井寛次郎, 志賀直哉, 富永惣一, 長與善郎, 濱田庄司, 武者小路実篤, 安井曾太郎, 柳宗悦「芸術と人: 大原美術館二十周年記念公開座談会」『中央公論』743号, 1951年1月, 187-200頁。河井は大原家とは1923年頃から交流があり, 当該の陶器をこの時初めて見たとは言えない。
- 63 河井透氏への聞き取りによる(2014年10月25日実施)。20世紀以降の作家にとって, インスピレーションの源泉を出自にとらわれずに求めることが可能になったことは, バーナード・リーチも認識しており(鈴木禎宏『バーナード・リーチの生涯と芸術: 「東と西の結婚」のヴィジョン』ミネルヴァ書房, 2006年), 同時代の関心事であったと言える。
- 64 河井寛次郎「壮麗沖繩」『民芸』55号, 1957年7月, 4-5頁。また, 河井寛次郎『炉辺歓語』東峰書房, 1978年6月, 122頁(1964年1月16日に実施された座談記)。

